第１０回　教職概論　学生の解答（コメント）抜粋

A

まず佐藤晴雄「テレビドラマから見た理想の教師像」（「教職概論」）ではドラマからの理想の教師について、6つのタイプに大別されて書かれていた。私は教師が登場するドラマや漫画、映画などを見ることは少し億劫になる。フィクションであり、現実ではそうはならないという先入観からである。しかし文献を読み、時代ごとにドラマなどで表される教師像に違いがあることを知り、衝撃を受けた。また実際、求められる能力も知識や指導力だけではなく、志や児童生徒への関わり方も必要だとわかった。魅力的だと思う教師像は、自分の信念を貫くタイプの、いわば異端なタイプの教師だ。常に視点が子どもたちであり、どんな理由があろうとそれは変わらない、という魅力を含んでいると思う。型破りすぎて、さすがにありえないとは思ってしまうが、教師としての心持ちは凄みがあると感じる。

次に、原田彰「教師論の現在」では、その時代ごとに葛藤があることが書かれていた。とても共感できる部分だと思う。それは『二十四の瞳』にそのような部分があるからである。また教師は私生活を子どもに想像されがちかなと思う。学校での先生と家での先生どうギャップがあるのか、憶測の域をでないが、ドラマや、漫画などからの情報でも想像ができる。しかしそれが少し偏ったイメージになると知った。そして、文芸作品では「実験」がなされると記されている。とても興味深いと思う。教師論に正解はなく、一つ一つ重視すべきところがある。その中で、作者の願いや祈りがこめられている教師像が現れ、それがどのような形で児童・生徒に影響与えているのか、そこを注目することも文芸作品を読む時の1つの面白いところだと思う。

2つの文献から、教師像が多数派生していることを知った。教師像が多くあることは分かっていた、つもりでしかなかったことに気づいた。ドラマなどで表されるだけでこのように多くある。現場ではさらに多く、実際の児童生徒の反応も見ることができる。もちろん教壇に立つ時には教師論を軸として確立し、柔軟に対応できるといいと思う。

B

改めて教師のドラマを思い返してみると、どの先生も強い意志を心のどこかに秘めていると思います。小学生、中学生、高校生でも、教師に限らず、人間のそういうところに惹かれるのだと思います。そして、プラスの影響を受けることで、生徒も高めあえると思いました。また、文芸作品から、多くのことを学ぶことができ、取り入れられることがわかりました。私は今まで、教師のドラマでは、例えば、実際のイジメはこんなわかりやすくないなどのように誇張しすぎだと思っていたことがありました。しかし、講義ノートにありましたが、ドラマなどの作品は、理想の教師に隠されていること、現実社会では見えにくいものを明るみに出しているとあり、自分にとって新しい見方を理解することができました。教師になる前に、もっと多くのものを見て、聞いて、経験して自身の成長に繋げていきたいと思います。

C

私は『２４の瞳』に登場している大石先生はとても明るく元気で純真な心をもっており生徒のことをよく考えている良い先生とわかりました。実際の教師でこんなに一人一人生徒に親身になっている先生は多くはないと思います。この教師は「理想の教師像」だと思いました。

私はその中でも「当時とは違う新しい考え方をもつ」ところが一番印象が強かったです。当時の固定観念には沿わずに新鮮なところが良いと思いました。当時は女の教師は着物が当たり前でしたが先生は西洋風の服を着たり、自転車を使っているところです。案の定、最初は大人たちはあまり良い印象は持っていませんでしたが子どもたちの先生に対する一途な気持ちを見て変わるところはとても感動しました。

また、自分の生徒であった子どもたち（男）は成長して兵隊を志願する子たちに対して「名誉の戦士など、しなさんな。生きて戻ってくるのよ。」といいます。当時は自分の国のため、天皇様のためと戦争で活躍することが素晴らしいことだと考えられていましたが、先生は単純に自分の大好きな生徒が戦争で死んでほしくないと伝えるところが当時と違うと思いました。「教師」は手本でいて、当時の考えを教えていくものだと考えていましたがこの物語を読んで新しい考えを伝えることも大切だと思いました。

このように先生は当時の考えとは違う思考な方できっとその環境の中で新しい行動をとるには勇気なども必要だったと思います。それでいて生徒をとても考えている行動が新しい行動の中の1つでもあったと思います。私も大石先生のような新しいことを発信できるような、生徒を一番に考えられるようになりたいです。

D

私は二十四の瞳を読んで、大石先生はどんな人物なのかを知りたくなったので、本書から考察してみることにした。

私は最初に、大石先生が生徒に対して思いやりを見せたシーンを振り返れば、大石先生の教育理念とは何かを見つける事が出来るのではと考えた。

まずはP.48 L2～ で大石先生が、よろずやのおかみさんに叱られて落ち込んでいるところを教え子たちに気取られないように笑顔を取り繕ったシーンで、小学校教員として大切なものを大石先生は持っていると私は感じた。

大人の世界というものは、自分にとって理不尽なことがたくさん起こるものだ。しかし大石先生の、自分の感情に左右されずに目の前の教え子達に心配かけさせまいとするその行動に、私は心を動かされた。

子供が好きだからと言って教員になっても、子供たちの前で涙を流して心配させてしまったら教師としての示しがつかない。だから自分の感情を抑えてでも、子供たちを笑顔にさせることを優先する。これが、大石先生の教育理念の1つだと推察できた。

続いては、先生が子供たちに対して優しさを見せた、特に印象に残ったシーンを挙げたい。

P80 L8～の、コトエたちが大石先生を目指して一本松まで歩き、やっとの思いで先生に会えたシーンだ。この時先生を探していたコトエたちは、学校に来ていなかった大石先生の顔を見たいがために、親に怒られるとわかってでも、子供だけで遠いところまで先生に会いに行ったというシーン。教え子たちの成長を感じさせるワンシーンなのだが、同時に、大石先生の教え子達に対する優しさが現れたシーンでもあると私は感じた。通常、昔の田舎町の子供は、学校が終わったあと、家仕事に従事するのが当たり前だったという。決まった時間に家に帰ってこなければ当然親も心配するだろう。教員となれば、この状況で子供たちの身を案じて説教をするのが当然であり、教員としての義務である。しかし大石先生は遅くまで外に出ていた子供たちを責めることは決して無かった。私は大石先生が子供たちに向けた優しさをこのシーンで感じることが出来た。教え子たちの悪い行いに対して怒ることよりも、大人の手を借りずに1つの目的を達成出来たことに対して、子供たちの成長を感じざるを得なかった喜びから、大石先生は説教をしなかったと推測が出来る。

一見したら、悪い行いをした子供たちを叱らないのを、教員として間違った行いだという意見もあるだろう。しかし、子供たちがやろうとしていることを頭ごなしに否定するのは、子供たちの挑戦心の育成を阻害する要因になり得ると私は考えている。

子供たちがした行動が良いことか悪いことかをすぐに決めつけず、しっかり物事の本質をみて、あくまで子供たちの成長にとって良いものか悪いものかを考慮した上で、子供たちを褒めたたえたり説教をすること。これこそが、大石先生なりの生徒への優しさであり、教育の理念だと私は感じた。

E

現代の学校でも大石先生の性格は好かれる性格だなと思い、また大石先生の教師像に共感しました。最初の出席確認で生徒一人ひとりと話し交流を深める、またニックネームを知ることは、これから1年間毎日生徒と過ごしていく上で重要なことだと思うと同時に生徒からの信頼を得ることができる1つ方法だと思った。先生が怪我をし、長期間学校を休まなければならなかった時、どうしても先生に会いたい生徒たちは、村から先生の実家まで二里もある道のりを十二人の一年生が見舞いに行こうと決心した。そして疲れ切って空腹の中、誰一人欠けることなく歩き続けた生徒たちはついに先生と出会うことができた。自分の為に十二人全員がここまで歩いてきてくれた、自分を慕う生徒たちの純粋で純朴な心を思うと大石先生が涙をとめどなく流れるのはとてもわかる気がした。先生が今までの村(教師)の形にはまらず、生徒と気兼ねなくまっすぐ関わった結果がこのように生徒から慕われ、生徒が自分の為に行動に移した。

どんな些細な出来事にも全力で、生徒一人ひとりと向き合い、思う大石先生のような教師に少しでも近づけるように大学の授業一つ一つを大切に受けようと思う。

　また、これまで観たドラマの教師像で印象に残ったのは「３年A組」の菅田将暉演じる柊一颯先生の教師像。メッセージ性が強く、先生の一つ一つの言葉に感情、想いが詰まっていて伝わる人には伝わるものばかりだった。29人の生徒一人ひとりと向き合って接し、言葉は少し厳しいかもしれないがその人に今合う、必要な言葉をかけている。自分の生徒を気に掛けるのはもちろん、今回はSNSという大きな問題に対して全国の人達に呼び掛けている、そんな先生が少しでも増えたら世の中も少なからず変わっていく。とても考えさせられたドラマだった。

F

一昨年に放送されていた「3年Ａ組」というドラマは、自分の中ですごく印象的な作品である。SNSによる誹謗中傷をテーマにしたドラマであり、現代を生きる自分たちにとってとても考えさせられるところが沢山あった。中でもこのドラマの良かったところは熱血な先生の熱い言葉である。

今どきの子どもたちは熱血だったり、情が熱かったりすることを恥ずかしいと思っている節があると感じる。このドラマでも最初は先生のことを否定的に考えている生徒が大多数だった。しかし、最終的に生徒たちに立派な大人になってほしいという願いや幸せに歩んでいってほしいという先生の熱い気持ちが生徒たちの心を変えていった。

教師の本質とは何なのか考えたときにやはり教科を教えることがすべてではないし、むしろそれ以上に大切なことがあると改めて思った。最後まで生徒たちを見捨てず真剣に向き合い一人一人の心を救った熱血教師のように、将来の生徒たちに本当に大切なことを自分の言葉で伝えていけるようになりたい。

G

ドラマ『３年A組』に登場する柊一楓先生はこういった。「今から皆さんは、人質です」

「俺たちが導いてやらなきゃならない、脆くて未完成な人間なんだよ。寄り添って一緒に答えを探す。それが教師の務めだろ」「右にならって吐いた何気ない一言が、相手を深く傷つけるかもしれない。独りよがりに偏った正義感が束になることでいとも簡単に人の命を奪えるかもしれないということを。これを見ているあなたに、ひとりひとりの胸に刻んで欲しいんだよ。他人に同調するより、他人を貶すより、自分を律して磨いて作っていく方が大切なんじゃないのか。その目も口も手も誰かを傷つけるためにあるわけじゃない。誰かと喜びを分かち合うために。誰かと幸せを噛みしめるためにあるんじゃないのか。もっと人に優しくなろうぜ。もっと自分を大事にしようぜ。」

これを聞いたとき、先生の生徒を想いながらかけたむき出しの言葉とその重さに胸が詰まってひとりでに涙が出てきた。今思うととても臭いセリフなのかもしれないが、一人が言った言葉だけでこんなにも感情を揺さぶられたり、自分の行動を振り返ったり諫めるきっかけになるのかとハッとする思いだった。また実際に自分が生徒だったら柊先生の言葉を聞いてどう思うのか、自分が教師だったらどう対応するのか、どういう言葉をかけるのかを考えさせられる作品だった。自分が生徒の立場であれば自分たちのことを想ってここまで言ってくれる先生がいるのかと涙をこぼすかもしれない。一方で馬鹿にしたり、歯牙にもかけない生徒もいると思う。

自分が柊先生の立場であればきっとこんな風な言葉はかけられなくてどうすればいいのか悩んでしまう気がするけれど、いくら馬鹿にされても自分がかける言葉によって一人の生徒でも気持ちが前向きになったり、助かる生徒がいるのならば私はいくらでも悩んで相談したり解決策を出したり自分にできることをやってあげたいと思う。

H

私の印象に残っているドラマ・アニメは、『3年A組』の柊先生、『ドラゴン桜』の桜木先生の2つです。これらの作品で共通していることは、生徒を思う理想の教師像が演じられていると思いました。

まず、『3年A組』では、教師が監禁や器物破損などの逸脱行為を犯しながらも、生徒たちの欠点を、柊先生独特の方法で教育していました。そして最後には、SNSの危険性や正しい使い方を自分の命を削りながらも教育をしており、美しすぎる教師像だったと今思いました。

次に、『ドラゴン桜』は、今ではかなり問題になってしまうような教師像ですが、『本質を見抜く力』や『固定概念を捨てる』などといった一つ一つの言葉の重みが違うと見ていて思いました。そして生徒の問題を教師が解決することは簡単かもしれないが、それでは生徒の成長はない。だからこそ、桜木先生は最後には生徒に問題を解決させているのではないかと思いました。言葉遣いや態度は現代では、許されることではないと思うが、これこそが教師の本質なのではないかと実感しました。

これらの教師の姿を真似ることは不可能だと思うが、教師の本質を理解することはできると思う。ドラマ・アニメの教師は、教師とは何か。どうあるべきか。を深く考えさせられるものだとも思いました。

I

私は、教師が登場する映画やドラマなどを考えるとGTOや女王の教室が浮かびました。どちらの作品も、教師が児童生徒のために自分を犠牲にして行動したり、学校や社会の固い決まりなどにとらわれず、自分が正しいと思ったら貫き通すというイメージがあります。

　この２つの作品を見る前から、教員の仕事は全てが児童生徒のためということは理解していましたが、見たことで、教員という仕事についての理解が深まったと感じました。そして、教員一人一人がそれぞれの考えを持って児童生徒を指導することは大切だと思うが、その指導もある程度の決まりは守る必要があると感じました。なぜなら、GTOや女王の教室では、学校や社会のルールを少し破っても最後は児童生徒のためになり、ハッピーエンドで終わることが多いですか、現実でも同じようにいくと考えることは難しいと思ったからです。

私にとってのドラマや映画の中の教師像はかっこよくて、正義というイメージが強いです。しかし、現実で同じように行動できるのかなど、実際の教育現場だったらと考えることも大切だと思いました。

J

自分は映画やドラマ、小説が好きでこれまで数々の学校が主となる作品も見てきました。その中で、主人公である教師が上からの圧力や、モンスターペアレントの理不尽な言い草などに負けず、生徒一人ひとりと真剣に向き合い、寄り添うというストーリーを見た時に、教師への憧れが生まれました。周りに左右されず、正義感があり、決して職務を怠らない、その主人公の性格が私の理想でもあります。ドラマや映画で学校の実態を描くことで、多少上下関係やいじめなどを誇張していたとしても、その分見ている私たちに何かを訴えてきて、深く考えさせてくれる作品となります。

最近のドラマでいうと、NHKで23:00〜23:30の間で放送されていた山田裕貴さんが主演されていた「ここは今から倫理です」という作品を見ていました。その作品では、1話が性行為について、2話は母親がシングルマザーで家に帰ってくるのが遅いため、友達と夜遊びまわり、朝帰りして来て、授業を寝てしまう生徒に対して、3話は、教師と生徒との間の恋愛について、4話は、チンピラたちに絡まれてしまう生徒について、5話は、リストカットなど自傷行為を行ってしまう生徒について、6話は、成績やスポーツは万能だが、友達との関わりがない生徒について、7話はいじめについて、8話は、いじめを倫理の授業と絡ませて対談するという物語でした。

全話30分、8話という短いドラマではありましたが、その1話1話の内容が濃く、とても考えさせられるものがありました。主人公である先生が倫理の担当でしたが、有名な偉人の名言をそれぞれの生徒に伝えていく所も偉人の言葉だからこその説得感があり、そういう伝え方もあるのだと感心させられました。